

【論文】

「幻」巻の物語表現論
——記憶を誘う物語風景と感覚——

高橋 美由紀

(二〇一七年九月二十九日受付、二〇一七年十二月十八日受理)

A Study on Narrative Expressions in the Chapter 'Maboroshi' (Mirage) in *The Tale of Genji*
—— Portrays of Scenes and Senses that Bring Back Memories ——

Miyuki TAKAHASHI

(Received: September 29, 2017, Accepted: December 18, 2017)

要旨

本稿は、『源氏物語』「幻」巻において光源氏が感受する風景表現について考察し、その風景と本文の中の記憶との関係について論じる。

語られた物語空間の中で光源氏の思惟が反映される景物を風景と捉え、それらを単なる自然描写、情景描写としてではなく、風景が心を揺るがすもの、心象に反映するものとして考えていく。視覚のみでなく、聴覚、嗅覚、触覚など五感を通して感受する風景が、物語の中でどのような意味をもち物語の中に機能するか、本文の分析と考察をする。光源氏の終焉となる「幻」巻において、四季の流れに沿って語られていることが、記憶を引き寄せるために不可欠であることを併せて考えていく。

Abstract

This paper focuses upon expressions used to depict scenes Prince Genji enjoys in the 'Maboroshi' in *The Tale of Genji*, and considers the relation between scenes and their recollections in the narrative.

By regarding what Prince Genji thoughtfully reflects upon, as scenes de-

icted in the space of the narrative, the author points out that these scenes not only show depictions of nature and scenery, but also touch the heart and reflect upon these mental images. As for the scenes felt through the five senses not only sight, but also hearing, smell, and touch, this article analyzes what they mean and how they work in the narrative, and finally argues that portraying the scenes as the passing of the four seasons is essential to Genji's memories, brought back by his thoughtful recollections, in 'Maboroshi' the chapter leading up to his death.

キーワード

幻・風景・記憶・五感・聴覚

Key word

Maboroshi・scenes・recollection・five senses・hearing

学位

高知県立大学大学院 修士(学術)

University of Kochi Graduate school Master of Arts

1 「幻」巻に語られる風景と記憶

(274頁)

『源氏物語』に語られる風景の描写は、登場人物が見ている単なる自然の描写ではなく、心のありようを映すものであり、またその心象に働きかける風景として捉えられている。このことはたとえば倉田実氏が「源氏物語の風景は、物語を読み解く術語であり、単なる物語の背景ではなく心象風景というように人物の心象と結びついている。」⁽¹⁾と説くように周知のことである。さらに高橋文二氏は「景観としての自然の印象が、形なき心を縁取る形として記憶の底に沈み、折々は蘇って今の心を揺する」⁽²⁾として、自然描写を単なる情景描写ではなく、心も揺るがずものとしての意義を与えている。

拙稿では、「幻」巻本文に語られる風景描写について、過去の記憶が呼び起こされる場面は、光源氏がどのような風景をどんな感覚で感受したことによるのかを考察し、それらと紫の上の記憶との関係について物語の進行に添って述べていきたい。視覚のみでなく、聴覚、嗅覚など、感受する感覚の違いを明確にして本文を読み解いていきたい。

2 記憶の機能

まず、「記憶」とは何か、どのような機能を持つかを整理しておく。文学の立場から少し離れるが「記憶」について心理学の研究を導入して考えてみたい。清水寛之氏は記憶の研究について次のように述べている。⁽³⁾

心理学の立場から個人の思い出に関する実証的研究が本格的に進められるようになったのは、そう遠い過去ではなく今から30〜40年ほど前のこと……種々の実証的研究が開発され、多くの研究知見が着実に蓄積され始めたのは、およそ一九七〇年代後半になってから……

このように「記憶」の研究は一九七〇年代後半からということ、定義づけられることばをすべて、千年も昔の物語に当てはめようとは思わないが、『源氏物語』は、読者が登場人物に同化して享受できる物語として千年以上もの長い時において読まれ続けてきた。このことは、物語を享受する人として本質的なものは変わらない、もしくは人として共通するものが存在するからではないかと考える。対象が物語の虚構の世界ではあっても、千年以上も読者に享受されてきた作品であり、その物語の主人公の記憶という概念に関しても、現代の我々と重ね合わせられるのではないかと考えた。

人が過去してきた膨大な時間の中から記憶として甦って来るのは、印象的な出来事や、強く心に刻まれた思いやその経緯などが大部分を占めるであろう。しかし、特別なことでもなくとも長い時間、見たり聞いたり触れたりなど感受してきたことは、ふとした時に、何かをきっかけとして甦って来る。

ここで「記憶」について、機能をとらえておきたい。「個人が過去に経験した出来事に関する記憶」は「自伝的記憶 (autobiographical memory)」と言われ、「自」の同一性や連続性を保つのに、思い出は一つの本質的な役割を果たしている」(274頁)とある。

また心理学で一般的に記憶は「エピソード記憶と意味記憶」(Treving 1983/1985) という区分ができるという。

エピソード記憶は個人的な経験や、特定の事物、人物、出来事など、個人がある時間に、ある場所であつた事柄に関する記憶である。

一方、意味記憶はこの世界に関する事実や規則、ことばの意味など、

一般化され抽象化された知識から構成されている。したがって自伝的記憶はエピソード記憶と重なり合っている部分が多いと考えられる。」(275頁)

自伝的記憶の働きや役割について、「①自己機能②社会機能③指示機能という3つ機能 (Bluck, 2003)」に分けられ説明がされている。

- ① 自己機能—自伝的記憶が自己の連続性や一貫性の基礎となり、一定の自己像を維持する働き (276頁)
- ② 社会機能—自伝的記憶が対人関係や他者とのコミュニケーションを促進するという働きをもつことである。自分が個人的に経験した事柄を他者に示すことは一種の自己開示であり、親密な対人関係を形成し維持するのに役立つ。(中略) コミュニケーションの参加者とともに経験した出来事を話題にする場合には、個人的記憶を共有していることを確認しあい、その記憶の細部を修正しあったり、補足しあったりする。(277頁)
- ③ 指示機能—自伝的記憶がさまざまな、問題解決や意思決定、行為の実行・調整を方向づけるという役割を果たしていること (278頁)

また、ナイサー (Neisser, 1982/1988) は「あらゆる人は自分自身を定義するために過去を使用する。」(16頁)、「ある種の自己改善の探求において人はしばしば過去経験を再生する。」(17頁)と述べている。⁴⁾

これら記憶の機能を「幻」巻に当てはめると、女房達と物語することや、過去の出来事を振り返っていることなどが物語の中において、大きな役割が担わされているといえるのではないだろうか。物語の中におい

て「記憶」は物語世界を重層的に読むことができる方法であると考ええる。

風景に描かれる四季の移り変わりは規則的な時間の流れであり、エピソード記憶として季節の景物は記憶の中で印象付ける要素になる。

「幻」巻では新たな物語の展開があるのではなく、過去を振り返ることで物語空間を埋めている。光源氏は「自分自身を定義づけるのに過去を用いる」ように自分自身の述懐をし、物語風景を感じたことを発端に、紫の上の姿を記憶の中から引き寄せている。過去を振り返り、記憶の中からその時々を思い描き、時間が進行していく。その作られた物語空間を我々読者も光源氏の記憶とともに享受しているのである。

3 「幻」巻先行研究と物語の時間と四季

物語に語られる風景が持つ意義について池田亀鑑は「景物とその類型」に次のように述べている。⁵⁾

時の推移は、無形で把握し難いものであるが、それが自然現象および動植物に変化をあたえることにより、人はその変化のあとを見て、時の歩んだ後を感じることが得るのである。我々の目が芸術的に鍛えられていればいるほど、繊細な事象の変化にも季節の性格を見逃すことなく、捉えることができる。景物は季節の推移とその感性とを表現するものである。ここに季節の象徴としての景物の概念が生じる。(462頁)

物語に季節の景物が語られていることによって時の進行がうみだされ、物語空間と物語の時が生成するということである。そして、物語に季節の景物が語られていることは、時の推移を表現するとともに、景物に触れることで生じる人の感性をも表現しえるということである。

また物語の中に流れる時間について、長谷川政春氏は直線的な物語時間と季節を通して繰り返される時間について論じられている。⁶⁾

ひとりの人間が生を享け死んでいく生涯を貫く時間は、一過性の直線的時間を基本とし、それを語るのが物語における一代記である。

『源氏物語』の第一部・二部は光源氏の一代記であり、・・・(中略)『竹取物語』もかぐや姫の一代記である。(290頁)

年中行事は、人の一生にかかわる通過儀礼と異なり、毎年その時を定めて、しかも共同体ごとのしきたりとして催される恒例的な儀礼であるゆえに、その時間は「円環する時間」である。(297頁)

物語世界の時間が、止めることも逆戻りすることも不可能な人生の間で、老いからまぬがれることはできない直線的なものと、繰り返される年中行事のような型を繰り返す、円環的なものとに捉えられている。戻ることのできない一過性の人生の時間と、繰り返される年中行事をとりあわせ、途切れることなく四季で一回りする螺旋状の時間が存在すると考えれば、年中行事や四季の風景によって繰り返される時の確認は、螺旋状に続いてきた過去の時間に容易に戻ることができると考える。それが記憶であるとするなら、年中行事は記憶を誘うツールであり、さらに四季それぞれにあわせて語られる自然の風景は記憶をたどる物語の方法と考える。

記憶という視点から「幻」巻とこれまでの巻の物語を繋いで考えていきたい。「幻」巻に漂う光源氏の憂愁は紫の上への思いだけでなく、「光源氏の物語」全体に拘るものであると阿部秋生氏は述べている。⁷⁾そして「幻」の巻一帖は、単に御法の巻の余韻・余情の巻というにとどまらず、

正篇四十一帖をしめくくる意味をもつ一帖だ」とも言及されている。季節の景物と記憶の関係も「幻」巻までの全体を捉えていくこととしたい。

四季の景物を語り、年中行事で時の進行を描く「幻」巻は、時の推移の方法を最大限に利用しているといえるであろう。自然風景は、花や木々等が変化し視覚によるところが多いであろうが、それだけではなく、雨や風の音、虫や鳥の声、衣擦の音、人の声、楽器の音などの聴覚や、気温の変化にあわせた空気の違い、またお香の香り、花や草の香り、焚きしめられた着物の香りなど嗅覚によっても感受される。四季によって変わる景物は、物語空間を作り上げ、情景描写として心情を表し、そして登場人物の心情に働きかけ、物語の展開に常に関わっていると考えられる。

物語に語られる風景を感じ取り、過去の映像が心の中に映し出されることは、直線的な時間軸の上に甦る記憶が何重にも重なり、物語空間を厚みのあるものに作り上げているといえる。「幻」巻に描かれている一巡りの四季の時間は、光源氏の人生の四季を含みこんでいる。

4 御簾の内から感じる春、紅梅と嗅覚の表現

「幻」巻の本文は冒頭以下のように始められる。

春の光を見たまふにつけても、いとどくれまどひたるやうにのみ、御心ひとつは悲しさの改まるべくもあらぬに、外には例のやうに人々参りたまひなすれど、御心地なやましきさまにもてなしたまひて、御簾の内におはします。(4)「幻」521頁⁸⁾

新春を迎えても、紫の上を喪った悲しみは癒えず、新年のあいさつに

来る人とは誰とも会おうとはせず、「御簾の内」と中にこもっている様子を語っている。

ここで光源氏の視覚にかかわる描写は、「春の光」である。新春を迎えたはなやかな場面のはずである。しかし光源氏は「悲しさの改まるべくもあらぬに」と紫の上を失った悲しみから抜け出せない様子で語られ、この「春の光」という視覚の描写を受け入れていない。

前年八月に亡くなった紫の上の喪は三ヶ月で明けているので年賀の挨拶に来る人たちがいても構わないということであろう。しかし光源氏は御簾の内にて誰とも会おうとしない。悲しみが行動を制御し、光源氏にとって物語に新しい展開はみられない。「春の光」を避けるように物語世界の視点は、奥へと引き下げられ、光源氏は喪に服し、薄暗い内にもって、視覚は拒否されている。

しかし、御簾の中にいて、その様な来客のことは直接見ずとも、人の声や物音、気配などで聞き知っていることになる。「春の光」を受け止められない光源氏ではあるが、視覚を拒否することができて、その他の感覚は拒否していないと考えられる。視覚以外で感受しているものを考えてみると聴覚・嗅覚は遮るものがなく、拒否されていない。光源氏に浮かび上がってくるのは、花の香りとともに、紫の上の着物に焚きこまれた薫りがただようかつての記憶ではないだろうか。

紫の上は、理想の女性の姿として、光源氏の最愛の人として語られてきた。そして光源氏の権力と栄華の象徴でもある六条院において春の御殿の女主人となり、誰よりも光源氏と共に時を過ごしてきた。その紫の上の姿が新春を迎えた光源氏のもとに存在しないのである。その姿は記憶の中に求めるしかない。

季節は同じ春、光源氏の最愛の女性であった紫の上が、春の館の女主人として六条院完成後初めて新年を迎えた時に、この上ない人として「初

音」巻に語られている。

春の殿の御前、とりわきて、梅の香も御簾の内の匂ひに吹き紛ひて、
 へ生ける仏の御国」とおぼゆ。 (3)「初音」143頁

紫の上が生きていた時の「春」は御簾のうちまでも、梅の香、薫物の香が匂っているところ。視覚だけでなく嗅覚においても春は感じていた。「御簾の内」であっても、梅の香や薫物の香は感じられ嗅覚の刺激により、記憶の中から光源氏の心には紫の上と過ごした季節が再現され、その姿が心の中に映し出されると考えられる。この「幻」巻の「御簾の内」に漂うはずの梅の香は紫の上との思い出を誘うものである。

また兵部卿宮の歌にも「香」と嗅覚にかかわることばがある。

香をとめて来つるかひなくおほかたの花のたよると言ひやなすべき
 (4)「幻」521頁

「香」は光源氏のことを重ねていて、引き寄せられるのは視覚ではなく嗅覚によるものである。「紅梅」について、「梅は色よりも香りを賞賛するほうが高尚」(4)「幻」521頁 頭注10)とあるように、嗅覚の意識は視覚以上に求められていたことになる。兵部卿宮の歌は、光源氏を花の「香」に喩え、香りに引き寄せられたと、嗅覚から感受できることばを詠みこんでおり、花の香は視覚以上の役目をもったものと考えられる。

紅梅の下に歩み出でたまへる御さまのへいとなつかしきにぞ、これより外に見はやすべき人なくや」と見たまへる。花はほのかにひら

けさしつづつ、をかきほどのにほひなりけり。(4)「幻」522頁

「へいとなつかしきぞ」と親しみを込めたまなざしは光源氏自身の視覚によるものである。「にほひ」とは視覚的な美しさであり、兵部卿宮その人を見ているのは、光源氏であり「花はほのかにひらけさしつづつ、をかきほどのにほひなりけり」と光源氏自身が心の中で声を発している。心が揺り動かされると考えられる。この場面では御簾の内にこもって見ることを拒否していた光源氏が、梅の香の立ちこめる中、歩み出て、兵部卿宮の姿に心を動かされ視覚を受け入れる側に向かった。嗅覚が視覚の拒否を解除し、物語の展開に関与したことになる。哀しみに沈み視覚を拒否していたところからは気持ちが慰められたと捉えることができるだろう。

この語りにおいては「紅梅」は「をかきほどのにほひなり」とあるように視覚で捉えられている。平安時代の「にほひ」と「かほり」について『源氏物語事典』「かほる」の項に次のようにある。⁹⁾

「にほふ」が色彩の映え目立つことを始原とするのに対し「かほる」は「芳香」がしめやかに漂うことを表現する例が多い。

ここでの「紅梅」は、兵部卿宮を「なつかし」＝「心がひかれる、親しみやすい」と感じさせる姿とあわせ、紅梅の花が視覚的・なうつくしさを捉えられている。

紅梅について、物語世界の中で「特殊な意味性を付与された記号」と述べているのは三田村雅子氏である。¹⁰⁾

源氏物語の前半の巻々では、梅にも紅梅にもきわめて冷淡であり、

素材としてとりあげても、美的対象として設定されることはまずなかったのに対し、後半の巻々では、紫上のイメージと結びつくことにより、紅梅は華やかさと品格を兼ね備えた最高の花として繰り返し捉えられるのである。(173頁)

紅梅に紫の上のイメージが物語の中で意味づけられていたとすれば、「幻」巻での光源氏には紅梅と紫の上の姿がしっかりと重なり合っている。

光源氏は「わが宿は花もてはやす人もなしなにか春のたづね来つらん」と花をほめたてる人である紫の上がいけないのにと、兵部卿宮に歌をおくっていた。

物語は「御遊びもなく、例に変わりたること多かり。」と、物語空間が静かであることを描写するが、「ない」と心に意識することは、逆に、梅の香り漂う中に、過去の賑やかだった音を思い浮かべるに違いない。記憶の中には、過ぎ去った新春の華やかな行事に合わせた「御遊び」があり、楽の音や、歌など賑やかに鳴り響いている。

5 「春の光」の記憶と聴覚の表現

「幻」巻冒頭に語られた「春の光」は五感によってどのように感受できるか、そしてこのことばの含み持つ情景をこれまで語られてきた過去の「春」の描写から捉え、記憶の機能として「幻」巻の「春の光」を検討する。

『源氏物語』の中に語られている「春の光」ということばは、『新日本古典文学大系 別巻 源氏物語索引』¹¹⁾によると「胡蝶」巻、「幻」巻、「早蕨」巻の三箇所に見られる。それらは次のように語られている。

- ・ 朝ぼらけの鳥の囀りを、中宮は、物隔ててねたう聞こしめしけり。いつも春の光を籠めたまへる大殿なれど、…
- ③ 「胡蝶」 169頁
- ・ 春の光を見たまふにつけても、いとどくれまどひたるやうにのみ、御心ひとつは悲しさの改まるべくもあらぬに、外には例のやうに人々参りたまひなどすれど、御心地なやましきさまにもてなしたまひて、御簾の内におおはします
- ④ 「幻」 521頁
- ・ 藪しわかねば、春の光をみたまふにつけても、へいかでかくながらへにける月日ならむと、夢のやうにのみおほえたまふ。
- ⑤ 「早蕨」 345頁

「胡蝶」巻での場面は、秋の町の女主人である中宮が、「鳥の囀りを、…ねたう聞こし召しけり」と、夜明けに聞く鳥の声に心の動きが連動している。ここでの「鳥の囀り」はすがすがしい朝を思わせるのでも、心ませるものでもない。中宮の心に「ねたう」という思い描かせたものは、夏の町からは見えない春の町でおこなわれていたにぎやかな催しの音楽や、人の声である。六条院の屋敷は紫の上の居所である春の町や中宮の秋の町など、四つの町が遮断されたものでないことを本文でも語っている。

この町々の中の隔てには、堀ども廊などを、とかく行き通はして、け近くをかしき間にしなしたまへり。

③ 「少女」 81頁

光源氏に、女主人同行き来のできるような心配りがあり、そこには物語空間にとって大きな意図があったと考えられるであろう。視覚的に見えないことでも、管弦の遊びのにぎやかな音や、人の出入りする音、

その他のざわめくような気配は十分に伝わっているはずである。東南の春の町と西南の秋の町は隣り合っているが、築山で遮られ庭から見ることができない。しかし、楽器の音、人のざわめきなど空から降り注ぐように、聞こえていたはずである。見えない分、伝わってくる音を耳にし、心が揺れていたと容易に考えられる。そしてその表れが「朝ぼらけの鳥の囀りを、中宮は、物隔ててねたう聞こしめしけり。」であり、離れた中宮のもとには空から鳥のさえずりのごとく聞こえていたのであろう。にぎやかな音が心へと響き、ねたみの心を浮き立たせてくる。そしてねたみの対象は、春の町の女主人である紫の上である。「春の光」は花が咲き誇り、楽の音が響きあい、大勢の人達を楽しませる春の庭のすばらしさのみでなく、その春の町の女主人であり、光源氏とともに過ごしている紫の上の威勢を表現している。

「ねたげ」¹³は、

① ちよつとしゃくにさわる感じであるさま。残念でくやしいとおもっているようなさま。

② うらやましく憎く思うほどに、立派であるさま。小憎いさま。という意味をもち、ただ相手をうらやむだけでない。

「ねたし」¹³の語源を見ると、

「名痛(ないた)し」の約。相手の名(≡評判)が高く、自分に痛く感じられるが原義

とあり、中宮の身分からしても紫の上のすばらしさを認めざるをえない悔しい気持ちがあったことになる。

鳥の声を聞いて、「ねたう」感じた中宮本人は春の町の風景は目にしていない。冷泉帝の中宮であり、里下がりをしていて同じ六条院にいたとしても、高い身分の中宮は容易な移動はできない。中宮は直接目にしていないことで、中宮本人は遠くから聞こえてくる声や楽器の演奏を「鳥

の囀り」として耳にして、複雑な心情を生み出していたことになる。

春の町の「夜もすがら遊び明かしたまふ」と、秋の町に居る中宮の「夜も明けぬ。朝ぼらけの鳥の囀りを、…物隔ててねたう聞こしめしけり。」と時間の同時性がある。場所が異なるだけである。鳥の囀りは、単にさえずりではなく、風にのり春の町から漏れ聞こえてくる歌や楽器の音である。この「鳥の囀り」について、頭注二五も「…人々の美声を喩えていう。」とあり、春の町の声が風にのって聞こえていたことをいっている。

玉上氏も次のように述べている。⁶⁴⁾

とうとう夜も明けた。東の空が白み始めるころには、小鳥がさえずる。といつても、実は今の場合の鳥のさえずりというのは、「青柳」の中に出てくる鶯にちなんで、あるじの大臣の、「青柳」をさす。その青柳をみごとに歌いこなされる声を、築山をへだてた西南の御殿では、中宮がうらやましく聞いていらつしやる。…じつと耳をすまして、春の御方の様子をうかがっていらつしやる。

(第五巻229頁)

聞こえていたのは中宮の方だけではない。春の町が楽器の音や歌で響き渡っていたのである。本文に「安名尊遊びたまふほど、へ生けるかひあり」と、何のあやめも知らぬ賤の男も、御門のわたり隙なき馬、車の立処にまじりて、笑みさかえ聞きけり。」(③「胡蝶」168頁)とある。屋敷の中には入れない身分の低い男たちも、門の外に集まってきてはその歌声や楽器の音に耳をすませていた。教養のない男たちでさえ生けるかひありと感ぜさせるものであったということは、六条院の中に居る他の町の女たちが、聞く音に心をどれほど揺り動かされているかと

想像できる。

夏の町の花散里、冬の町の明石の君にも春の町の様子が伝わっていることが、別に語られている。

かくののしる馬車の音をも、物隔てて聞きたまふ御方々は、⁶⁵⁾蓮の中の世界にまだ開けざらむ心地もかくやと心やましげなり。

(③「初音」152頁)

「物隔てて」と、大きく揺れ動く心は視覚ではなく聴覚をうけて語られている。

正月の行事である「臨時客」は、光源氏のもとに上達部や親王たちが「残ることなく」年賀の挨拶にやってくるのである。出入りの人や車の騒々しさ、宴での管弦の遊びの音がある。光源氏の居所は、紫の上とともに居た春の町である。その春の町の賑わいは、読者である我々と、物語中の宴に同席するものの視点には華やかに光源氏の栄華を確認させる。しかしそれと共に、宴の様子が見えないところの者には、音としてのみ届き、思い悩ませていることになる。光源氏の女主人同士の行き来ができるような心くばりはこのような心の相を作り出すことを可能にする。花散里、明石の君が紫の上の威勢を感じ、自身が紫の上との差を感じ取るのは、表面的なものだけではない。華やかな行事の部外者たちは、何も見えない離れたところにおいても、同じ六条院の世界にいる者として遠くから聞こえてくるにぎやかな音を聞かされていることになる。

中宮に「ねたう」感ぜさせたのが、「鳥の囀り」である。目には見えない春の町のにぎわいは「春の光」として中宮に心の中に映り、春の庭の象徴となる女主人、紫の上の姿が中心にあるのではないだろうか。

光源氏死後の物語である「早蕨」巻には、宇治の地において、中の君が

亡くなった大君を思いながら新年を迎え、悲しみ過ぎす場面に用いられている。

同じことばで語られる「幻」巻の「春の光」にうつりこむものは、記憶の中から、晴れやかな喜びに溢れたかつての輝かしい情景である。眼前にはない映像を、心の中に呼び出したものが「春の光」であると考えられる。

「春の光」により引き寄せられた記憶に重ねることにより、六条院春の町の女主人として、また二条院の主人として共に暮らしてきた紫の上の姿が、光源氏の眼前には幾重にも表出してくると読むことができる。

その悲しみから遠ざかるように視覚の光を拒否していたのであるが、視覚を拒否してもそれ以外の感覚は拒否しきれない。梅の香を感じる嗅覚や、例年と変わらず新年の挨拶にやってくる人々の声や様々な音をとらえる聴覚は、紫の上を亡くし悲嘆にくれる光源氏に対して拒むことのできない感覚として感受され、無言のうちに物語の中に記憶は引き寄せられている。

6 女房達との「物語」と紫の上の「けはひ」

繰り返される「つつ」の表現をとりあげ、記憶の中の紫の上の姿を考察する。

人に会おうとしない光源氏は紫の上の傍で仕えていた女房たちのみを近くにおく。光源氏の視覚には「女房なども、年ごろ経にけるは、墨染めの色こまやかにて着つつ」とあり、「年ごろ経にける」女房たちのみの姿を視覚で捉えている。「着つつ」と、接続助詞の「つつ」が動作の反復や継続を表し、そのような喪に服している女房の姿を、光源氏は繰り返して、繰り返して、目に行っていることになる。物語の中の時間が何度も同じようなことで回っていて、ここでは紫の上への追慕が繰り返されて、

その思いがより深まっていくことになる。

光源氏の記憶の中にも「つつ」は使われていて、そのことが「何度もあった、あれもこれも」と思い起こされる表現である。物語の時間が、語られなくても広がり、過去の記憶が重ねあわせられていく。

・ さしもありはつまじかりけることにつけつつ

④「幻」 523頁

・ そのをりはしも：事にふれつつ

④「幻」 523頁

この「つつ」については、清水好子氏が、「光源氏の懸想と玉鬘の困惑煩悶の期間が相当時間継続していること」(224頁)¹⁵⁾の表現として言及されている。「つつ」を頻用することは、時間経過を印象付けるとともに「時間のことは深く沈めて、人々の内面の動きを通して、物語を進めてゆこうと意識的に構えている」と解釈されている。四季の景物が描かれていない「幻」巻の場面では、この繰り返しの時間こそが物語空間を支えるものになっている。女房たちと語ることで紫の上の記憶へ常に繋がる。玉上氏も女房について次のように述べている。¹⁶⁾

女房なども年ごろ経にけるは」と「は」があるから、特に取り出して言っているのである。：新年に新年の装いをするのは、女房の生きがいとも言うべきである。：それが今年は、その気になれない者がいるのである。(9)118頁

記憶と無関係な若い女房は喪の服装ではないのであろう、光源氏の悲しみと対応できず光源氏の心に通じるものでなければ物語空間に相容れないものとして、描かれてはいない。

紫の上を喪い、光源氏と悲しみを共有できる女房たちとの会話が物語世界を作り上げている。光源氏の自身の回顧が語られ、会話をする中から記憶が呼び起され、思い返すことから心中での声が描写され、紫の上への追慕の情が果てることはない。

「幻」巻では「御遊び」もなく、聞こえてくる音は少ない。ここでは女房たちと「物語」する光源氏の声であり、あと「御手水して行ひたまふ」という光源氏の経のみで、他に聞こえてくるものはこの新春の物語空間にはない。「例に変わりたること多かり」と、例年ならあるはずの行事などがなく、「物語」している人の声で空間の音は構成される。そこには実際話しことばばかりが語られるのではなく、そのことを聴いた光源氏の心の中の描写があり、亡き紫の上の記憶ばかりが場面に登場する。「物語」とは話すこと、会話であり、「物語」に関する描写を挙げる。と次のように「幻」巻のはじめには、短い間に何度も語られている。

- つれづれなるままに、いにしへの物語などしたまふをりもあり。
④「幻」522頁

ここでは、紫の上が「中ごろもの恨めしう思したる気色の時々見えたまひしなどを思し出づるに」と嫉妬する姿が思い出され、悩ませた日々を思い返すことになる。「気色」の意味を古語辞典に見ると、「現代語では風景だけに限定するが、本来は外形に現れた様子を広くいい自然の様子①にも、人の様子②にも、物事の様子③にも言う。」とある。この場面では「②人の風姿・態度・心持・顔つき・音声。」を意味しており、光源氏の心中に紫の上の映像が映し出されていることとなる。

- そのをりの事の心も知り、今も近う仕うまつる人々は、ほのほの聞こえ出づるもあり。
④「幻」523頁

光源氏は語ることから聞く側が変わり、さらに詳しく記憶をたどっていくことになる。そして「いみじう積もりにける雪かな」という声に連動するように、聴覚の刺激から今と記憶が結び付き、湧き上がる哀しみの気持ちを歌にする。「物語」することから、過去の出来事が引き込まれ物語時間は埋められている。

- 中納言の君、中将の君など、御前近くて御物語聞こゆ
④「幻」524頁

ここは、光源氏が自らの人生について吐露する述懐に繋がる。出家しないでいる自分を「わろかりけるころのほど」と現世への執心について省みる。この世の絆であった紫の上亡き後、執心はなくなったはずであるのに、眼前にいる女房たちとのつながりを、「いま一際の心乱れ」という。女房たちは聞くばかりで「おのおのうち出でまほしけれど、さもえ聞こえず」と返答することはない。物語の展開には関与しない。

- かのおしなべてには思したらざりし人々を御前近くて、かやうの御物語などしたまふ。
④「幻」526頁

ここも「へ人よりことにらうたきものに心とどめ思したりしものを」と思し出づるにつけて「:」と過去を意識していて、紫の上の姿が思い出されている。中将の君は、幼いころから紫の上を召し仕えていた女房であって、「うなる松におぼえたるけはひ」と紫の上の姿はなくても、雰囲気そこに存在が感じられるかのように捉えられている。「うなる松」

については、『源氏物語事典』「松」の項に「うない松。馬鬣松。馬のたてがみのような形をした塚に生えた松。故人の形見をいう。「幻」巻で、紫の上の侍女の中將の君をさしていう。」¹⁸⁾とある。『新編日本古典文学全集源氏物語④』は「これから生長する小松。『河海抄』などは、墓に植えた松で、中將の君を亡き紫の上の形見の意に解す。」(526頁)¹⁹⁾と表わしている。付録において『河海抄』の論を引きながらも「結論的には紫の上に似ている、の意味にちがいはないらしいが、墓の松の形から、紫の上をしのぶという点ではなお不審な点が残るか。」(583頁)と異なった捉え方も示唆されている。「うなぬ」の意味は「童子の髪型で、髪の前近くをえりくびのあたりでたばねたもの。うなぬの髪形をした童子。」²⁰⁾という意味をもっている。このことから考えると、光源氏には紫の上のいつごろの「けはひ」を感じたのだろうか、と考えることもできる。紫の上を幼い時から手元で育ててきた光源氏にとつての紫の上の記憶は大人だけとは限らず、小松が生長していくように、長い時間に渡る紫の上の記憶があるはずである。

中將の君は一人の女性としてみられてはいるものの「おほえたるけはひ」とは紫の上と雰囲気が似ていることを言っている。「気色」との違いから考えると、「けはひ」は「容貌・姿態・態度から感じられる気品・風格のようなもの。」をいい、「あたりに広くただよっている雰囲気をいうのが原義である。「けしき」が視覚や聴覚で捕らえられる様子をいうのに対して、「けはひ」は心に感じられるものをいう。」²¹⁾とあり、「けしき」によって思いおこさせる紫の上の記憶は、容貌だけでなく彼女のしぐさから感じた品格や姿はなくともかつての息遣いまでも感じさせていることになる。また、「けわい(けはひ)」²²⁾の項目に「「けはひ」は目に見えない状態において、対象を雰囲気や様子によって感受する際に用いられる。…人物の内面からにじみ出る「けはひ」は人物の本性をも表し、他

者によって知覚され、そして感覚を通じた人格造形の表現」とあるように、光源氏自身が姿なき紫の上を、記憶の中の姿として想起することで彼女を「幻」巻の物語に存在させていたと考えられる。

「御遊び」もなく、来客者とも会わずに過ぎた新春は、「物語」した光源氏の声と彼の心の中に映し出された思いや過去の映像が物語空間の多くを埋めていたことになる。

光源氏の心中を語るモノトーンの世界に、明るい変化を与えるのが、今上帝と明石の中宮との間に生まれた三の宮の登場である。生前の紫の上が「まろがはべらざらむに、思し出でなんや。」(④御法」502頁)と思いついてくれることを願って三の宮に話かけていた。付録の年立(④591頁)によると、三の宮は六才である。記憶として物語に登場するきっかけは準備されていたと考えられる。それも「人の聞かぬ間に」とあり物語の時間の中に潜在されていた。出家に踏み出せない五十二才の光源氏と、生き生きと活動し成長する三の宮との対比は、物語の進行に動きを持たせ、大きく弾みのある展開であろう。さらに「さうざうしき御慰め」に光源氏の下に残された三の宮には、紫の上の不在を埋める役割を担わされている。「さうざうし」とは「当然あるべきものがない状態。」²³⁾とあり、すなわち紫の上の姿がないことであろう。姿なき紫の上との時間が、幼子によってうめられていく。

7 「女房の声」からよみがえる「そのをり」の記憶

光源氏が紫の上の苦悩を再確認する契機となる「女房の声」中心に、物語における聴覚による記憶の機能を考察する。

小町谷氏は「紫の上の死は何をもたらすのか。…それはただ光源氏の悲嘆につながっているのである。光源氏の悲嘆、それは第一級の人物の悲しみ為るが故に、紫の上の死も第一級なのである。」(210頁)²⁴⁾と紫

の上の死が物語にもたらず意味を捉えている。そして光源氏が紫の上を追慕する「御法」巻の後半から「幻」巻では「紫の上はその死にかかわらず依然として物語のヒロインとして存在し続ける」と述べている。物語の中に生き続ける紫の上はどのように表出されているのか。それは光源氏の心の中に、心の声とともに姿を現している。そのきっかけの一つになるのが「物語」である。

紫の上を亡くした悲しみから、光源氏は人に会うことを拒み、紫の上の側にいた女たちと語って過ごすばかりと語られている。その本文について言説の分析を試み、注目したい。

つれづれなるままに、いにしへの物語などしたまふをりもあり。
 …中ごろもの恨めしう思したる気色の時々見えたまひしなどを思し
 出づるに、へなどて、たはぶれにても、またまめやかに心苦しきこ
 とにつけても、さやうなる心を見えたてまつりけん、何ごとにもら
 うらうじくおはせし御心ばへなりしかば、人の深き心もいとよう見
 知りたまひながら、怨じはてたまふことはなかりしかど、一わたり
づつは、《いかならむとすらん》と思したりしに、すこしにても心
 を乱りたまひけむことのいとほしう悔しうおぼえたまふさま、胸よ
 りもあまる心地したまふ。そのをりの事の心をも知り、今も近う仕
 うまつる人々は、ほのほの聞こえ出づるもあり。

④「幻」522～523頁

「物語」することで、声には出てこない光源氏の心の中の声が幾重にも語られている。「物語↓思し出づる」と、会話をしたことが契機となり光源氏が回顧し、心の声が語られている。「などで」からは光源氏の心の中の描写であり、「内話文」である。光源氏の心と光源氏がそうで

あろうと考えた紫の上の心が、連続して表出している。「中ごろもの恨めしう思したる気色見えたまひし」と語られていて、記憶によって心には架空の姿が呼び寄せられている。この場面にある多くの「紫の上の心」は、光源氏によって考えられていることで、紫の上の本心とは言いがたい。「御心ばへ・人の深き心もいとよう見知り・怨じはて・心乱り」は光源氏自身の心の中で紫の上の心を代弁したものの、「胸よりあまる心地」は語り手が光源氏の気持ちを表現した「地の文」である。

「《いかならむとすらん》」は内話文の中にある内話文で、これは紫の上の心の声であり、「御心ばへ・怨じはて・心乱り」の光源氏が思い描いた紫の上の心と違った形で描写されている。他とは意識的に違う形で描写され、紫の上の本心の声の表現と捉えられる。「そのをりの事の心」とは、紫の上の身近で見ていた女房が知る紫の上の心を述べたものである。光源氏の思う紫の上の心と、「そのをりの事の心」には違いがあるはずである。

「などで」について、次のように注が付けられている。

「乱りたまひけむ」あたりまで、源氏の心内。ただし、「たまひけむこと…」とあり、直接地の文に連なる形。

④「幻」523頁 頭注17)

ここは紫の上の心を想像しながらその姿を心に描きだしている光源氏の声から地の文に移行する「移り詞」である。この箇所「心乱りたまひけむ」は紫の上への敬語と読める。紫の上を思う光源氏の心の声から、語り手が「いとほしう悔しうおぼえたまふさま」と光源氏を見る視点に移っている。「いとほしう悔しうおぼえたまふさま」の「…おぼえたまふ」と光源氏への敬語があるから、光源氏の「内話文」から「地の文」への

移り詞と考えられる。語られているのは光源氏側の心境「胸よりもあま
る心地」であつて、光源氏が紫の上の苦しさを理解したのではない。

玉上氏も本文を「……いかならむとすらむ、と思したりしを、すこ
しにても心みだりたまひけむことの、いとほしくやしうおぼえたまふ
さま、胸よりもあまることちしたまふ。」²⁵⁾と読点を付け、区切っている
ことから言えるのではないだろうか。

物語することによつて、そこに紫の上の姿が共通の記憶として物語空
間に存在している。「恨めしう思したる気色」とは光源氏から見える紫
の上の姿であり、光源氏が考えてきた表面的な紫の上の姿である。紫の
上の「そのをりの事の心」のいう心とは、ずれがあり、ここで「物語な
どしたまふ」ことで初めて紫の上の心にふれたとも言えるのではないだ
ろうか。過ぎ去つた「そのをり」を本文にみる。

風うち吹きたる夜のけはひ冷やかにて、ふとも寝入られたまはぬを、
近くさぶらふ人々《あやし》とや聞かむ、とうち身じろきたまは
ぬも、なほいと苦しげなり。夜深き鶏の声の聞こえたるものは
れなり。
④「若菜上」68頁

この場は聞き耳を立てているだろう女房たちに知られないように、身
じろぎさせず明け方までの時間を堪えて過ごしている場面に、鶏が声
を発するという描写である。音を立てまいとする抑え込まれた空気感か
ら、夜明けを告げる解放の声、これほど声を立てて思いを発することが
出来ればと、その対照的な場面で自制する心を感じずにはいられない。
とくに聴覚表現は視覚表現以上に、心情を物語っている。我々読者も抑
え込まれた彼女の姿と気持ちを感じて記憶として引き寄せることができる。

この後、女三宮を迎えた場面の記憶が物語世界として繋がっていく。

「入道の宮の渡りはじめたまへりしほど、そのおりはしも、…雪降りた
りし暁に立ちやすらひて、わが身も冷え入るやうにおぼえて、」(523
頁)と「わが身」とあるので、ここは光源氏自身が過去を振り返り、自
身の心中で語っている。その声と語り手の声が重なっている。

「おぼゆ²⁶⁾とは、「(自然に)…と思われる。想像される。わきまえる。」
などのほかに「(記憶に残つて)身にしみる。(感じて)こたえる。」と
あり、ここでは、「わが身」の過去の時空へ身を置くように、その折の
冷たさが今の身に染みて感じ入っているということになるだろう。

またここで光源氏の都合よく解釈されると読める箇所がある。「立
ちやすらひて」と記憶を語っている。その折の本文を上げる。

「猶残れる雪」と忍びやかに口ずさびたまひつつ、御格子うち叩き
たまふも、…(中略)人々も空寝をしつつ、やや待たせたまつり
て引き上げたり。「こよなく久しかりつるに、身も冷えにけるは。
怖ぢきこゆる心のおろかならぬにこそあめれ。さるは、罪もなしや」
④「若菜上」69頁

ここでは、朝帰りする光源氏への非難として、故意に女房たちが格子
を上げなかつたのである。寒い中待たされて「身も冷えにける」であつ
たはずが、記憶の中では「立ちやすらひて」とある。「立ちやすらふ」
の意味は「(たたくずんで)ためらう。ぐずぐずする。」²⁷⁾とあり、「立ちや
すらひて」と都合よく記憶の中で解釈していることから光源氏の立場
からの叙述であると理解できる。「幻」巻が記憶で語られているといえ
るのであろう。そして「女房の声」をきっかけに、記憶と重なっていた物
語空間が「幻」巻の時点に引き戻される。

曙にしも、曹司に下るる女房なるべし、「いみじうも積もりにける雪かな」と言ふ声を聞きつけたまへる、ただそのをりの心地するに、御かたはらのさびしきも、いふ方なく悲し。(④「幻」524頁)

「女房なるべし」とは、推量の「べし」という表現であるから声を発している女房の姿を見ているのではない。しかしその声をきっかけに「ただそのをりの心地する」と光源氏の思いが過去に戻り、心に響き、独詠歌を歌わせていく。記憶を引き寄せたのは視覚ではなく聴覚によるものである。

直前に「入道の宮の渡りはじめたまへりしほど、…」と光源氏の内話文で、女三の宮が降嫁して来た折のことを語っているが、「そのをりの心地」は直前に「物語」したからこそ、光源氏は紫の上との記憶を振り返ることになった。「そのをり」を知る読者も、光源氏の記憶から、かつて聴覚によって描写された紫の上の苦しみを思い出すに違いない。光源氏は、女房達と「物語」することで記憶が誘われ、過去の時間を振り返る。そして亡き紫の上は光源氏の記憶の中に存在し続けている。

「幻」巻は短い巻ではありながら多くの和歌が詠まれている。このことについて小町谷照彦氏は和歌の機能を「和歌が散文と異なった独自の表現・伝達機能をもっている」とし、「幻」巻には「和歌が特異な表われ方をしている」と論じられている。歌は詠む人の心情表現であり、抑えきれなくなった思いが歌に表現されるといわれている。小町谷氏は「感情の振幅が広がりすぎて散文でそれに追隨していくことができなくなつた。かくて和歌がそれに代わる方法として選ばれたのである。」とその役割を示している。和歌と物語の違いについて東原伸明氏は「韻文(和歌)の方法と散文(日記・物語)の方法」として韻文と散文の違いを『土

左日記』をあげて明確に述べられている。²⁹⁾

韻文の和歌や歌謡を享受する場合に享受者(読者)は、うたの詠者(作者)と同化(一体化)する。なぜならば歌は、「我」という一人称の直接言説、現在形だからであり、現在ただ今の自己の心情を直接吐露しているからである。…歌、韻文は、同一性を旨とした「同化の文学」であり、対象と同化・一体化することのみ、享受が可能なのである。…散文は個々の文脈において語る主体は転換しており、一人称から三人称にあるいはその逆に、同化と離化を繰り返している、動態としてある。(250頁～253頁)

「幻」巻の風景を眺めて独詠歌を詠む主体は光源氏自身であり、第三者の存在や介入はない。光源氏ただ一人の空間であり、風景を見る視線は光源氏本人のものである。その光源氏だけの空間には、光源氏の記憶からよみがえった紫の上の幻像との二人だけの時が存在していると考えられる。

光源氏が詠い、うみ出された紫の上との時空は、『源氏物語』が多くの場面で引用している「長恨歌」の中、王妃(楊貴妃)が作り出した漢皇(玄宗皇帝)との二人だけで語り合った記憶の中の時空と重なる。³⁰⁾

臨別殷勤重寄詞	別れに臨みて慇懃に重ねて詞を寄す
詞中有誓兩心知	詞中に誓ひ有り兩心のみ知る
七月七日長生殿	七月七日 長生殿
夜半無人私語時	夜半 人無く 私語の時

(「長恨歌」より)

ここまで、「幻」巻の中に語られる風景描写を光源氏がいかなる感覚

で感受し、そのことが光源氏の記憶とどのような関係があるのか考察してきた。情景描写と言われる風景は、視覚だけでなく、様々な音を心の奥深くまで響かせる聴覚や、花の香などを感じる嗅覚などでも感受され、作用している。この「幻」巻では、記憶を誘うものとして聴覚は重要な表現の手段になっている。

まとめ

光源氏の終焉として描かれた「幻」巻の物語空間に語られる風景を、光源氏がどのように感受していたかということを考察し、視覚以外に心に訴えかけるものとして嗅覚や聴覚が人の心に強く影響を与え、記憶を誘うことを明らかにしてきた。

「幻」巻に語られてきた一年の季節の移ろいの中にこれまで生きてきた四季を重ね合わせたことよってよみがえる記憶は、光源氏にとって決して喜びにあふれたものばかりではなかった。紫の上の苦悩も共に記憶として語られていたことは、同様のことがいえるであろう。『源氏物語』は、秘めた苦悩や老いや死など、逃れられない人生を幾重にも語ってきた物語であり、そこには、聴覚が人の心に強く影響を与えること、そして聴覚の表現が記憶を誘う重要な要素であることを認めることができた。

注

- (1) 倉田実「風景」(秋山虔編『源氏物語事典』學燈社 一九八九年)。
- (2) 高橋文二「風景と共感覚―王朝文学史論」(春秋社 一九八五年)。
- (3) 清水寛之「自伝的記憶の発達」(『時間と人間』発達科学ハンドブック第3集 編集 子安増生 白井利明 新曜社 二〇一一年)。
- (4) アーリック・ナイサー「記憶：何が重要な質問か？」(『観察された記憶 自

然文脈での想起』(上) u・ナイサー編 富田達彦訳 誠信書房 一九八八年)。

- (5) 池田亀鑑「景物とその類型」(『平安時代の文学と生活』至文堂 一九六八年)。
- (6) 長谷川政春「物語・時間・儀礼―源氏物語論として―」(『物語史の風景』若草書房 一九九七年)。
- (7) 阿部秋生「六条院の述懐」(『光源氏論―発心と出家』東京大学出版会一九八九年)。
- (8) 「新編日本古典文学全集」『源氏物語』小学館。なお引用の本文に山形括弧へ～や傍線、傍点などを加え、私的に加工をしている。
- (9) 「かほる」林田孝和 原岡史子編『源氏物語事典』(大和書房 二〇〇二年)。
- (10) 三田村雅子「梅花の美」(『源氏物語感覚の論理』有精堂出版 一九九六年)。
- (11) 「春の光」新 日本古典文学大系 別巻 源氏物語索引(四二二頁 岩波書店 一九九九年)。
- (12) 「ねたげ」『日本国語大辞典』第二版 第十卷(小学館 二〇〇一年)。
- (13) 「ねたし」『新選古語辞典』(小学館 一九七六年)。
- (14) 玉上琢彌「源氏物語評釈」第五卷(角川書店 一九六五年)。
- (15) 清水好子「源氏物語の作風Ⅱ」(『清水好子論文集第一巻 源氏物語の作風』武蔵野書院 二〇一四年)。
- (16) 玉上琢彌「源氏物語評釈第九卷」(角川書店 一九六七年)。
- (17) 「気色」『新選古語辞典』(小学館 一九七六年)。
- (18) 「松」秋山虔編『源氏物語事典』(學燈社 一九八九年)。
- (19) 「新編日本古典文学全集 源氏物語④」(校注 阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男 小学館 一九九六年)。
- (20) 「うなぬ」『新選古語辞典』(小学館 一九七六年)。
- (21) 「けはひ」『新選古語辞典』(小学館 一九七六年)。
- (22) 「けわい(けはひ)」林田孝和 原岡史子編『源氏物語事典』(大和書房 二

〇〇二年)。

- (23) 「さうざうし」『新選古語辞典』(小学館 一九七六年)。
- (24) 小町谷照彦「幻」の方法についての試論—和歌による作品論へのアプローチ—
(『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会 一九八四年)。
- (25) 玉上琢彌 前掲注(16)の書。
- (26) 「おほゆ」『新選古語辞典』(小学館 一九七六年)。
- (27) 「立ち休らふ」『新選古語辞典』(小学館 一九七六年)。
- (28) 小町谷照彦 前掲注(24)の論。(209頁)。
- (29) 東原伸明「散文の「学」を拓く、『土左日記』研究」(『土左日記虚構論 初期散文文学の生成と国風文化』武蔵野書院 二〇一五年)。
- (30) 「長恨歌」『金澤文庫本白氏文集』(勉誠社 一九八三年)。

〈付記〉

拙稿は、平成二十七年度高知県立大学大学院に提出した修士論文を礎稿としてい
ます。大学院在学中よりご指導いただきました東原伸明先生に感謝申し上げます。
ご教示いただいた、語る視点を常に考えながら本文に向かう姿勢が、これまでの研
究のすべての基礎となっております。

また、欧文による要旨は、以前高知県立大学で教鞭を執られていた李春美先生、
ローレン・ウォーラー先生にお願いいたしました。ここに記してお礼申し上げます。